人とつくるすいか

山上　一郎

聞き手・池田千華　森田美悠（石川県立羽咋工業高等学校１年）

山上さんのすいか畑

自己紹介

名前は山上一郎です。羽咋市粟生町に住んでます。昭和11年10月19日生まれ。家族は、妻が亡くなって、息子夫婦と、孫が長男と女の子２人。長女が27歳。次女が、今23歳くらい。

農業は、長男と２人でやっとる。後継ぎは私の長男がやります。今まで隣におったし、今はもう52やし、親子やし。「お前のやっとることは違う」とかは、言う。まあそれぞれに思いがあるし、すいかのことは分かっとるやろうと思っとる。マイナス面もプラス面も分かっとるやろう。言うても、言うこと聞かんときはあった。自分で何かしら考えてくれとるやろ。

農業をするために

高校では農業について学んだ。羽咋高校って学校でね。あのときは普通科と商業科と農業科と、女の人には家庭科というのがあった。そういう学科がたくさんあったわけや。私は農業科を志望して入学してんちゃ。そしたら担任の先生から農業に従事するときの心がけとか色々教わったわけやね。たしか、２年生か３年生の時やったかなぁ。校庭の一部に実習広場があって、野菜とかいろいろつくったね。苗の育苗の管理とかも学んだね。電気の配線で樹温をあげて、芽の発育をよくして、早期栽培をできるような野菜の作り方を習った記憶があるわ。その実習農場に種をまいてすいかをつくっているとき、連作障害っていう、すいかが大きくなってから枯れていってしまったり、変色して元気のない実ができたりしてしまう障害を知ったんや。それを防ぐために接ぎ木栽培っていうのを教わったわけや。あれから50年以上経つけ

ど、今でも私らのところでは接ぎ木栽培をやっとるね。

今、羽咋高校は普通科だけになったはいろ。農業科はうちらが卒業するときにもうなくなったんじゃないかな。それからは七尾の高校に、農業科の志望者は入学してんやろうけどね。今でも七尾東雲高校には商業科があるやろ。家庭科はもうなくなってしまったんやろうかねぇ…ちょっとわからんけども。

キッカケ

農業を始めようと思ったきっかけは、そうやねぇ…。まぁ、じいちゃんとばあちゃんが農業をしていたのをずっと見ていたからね。農業とはこういうもんやっちゅうことは小さいながらに思っとったねえ。高卒してからすぐにすいかをつくっとったね。粟生町は集落で、たくさんすいかをつくっとる人がおいでたから……。その人たちが生産組合をつくって、一員にさせてもらった。それから生産組合で農業をやることが本業になって、すいかをつくるわけ。生産組合ではね、そこに入っとる人と一緒に勉強会するげんちゃ。いろんなこと話し合ったり講師の方を呼んで教わったり。現地行って、これはどうすれば良いかという現地検討会をしたりするね。障害が出ていたら、これはどういう薬をやればいいかとか、色んなことあるはいろ。障害のことやら、つくり方のことやら、収穫時期はいつにすればいいか教わるんや。お互いに勉強するってことやね。

粟生町のすいか

品種的な問題から言うと、産地によってすいかの品種が違うがいね？　同じ羽咋の中でも産地、つまり生産組合が４つあるわけや。私達の住んでる粟生町は、その中の１つ。生産組合によって品種が違うもんで、自分らの土地にあう品種を選んで栽培しとるわけやね。

「能登すいか」は呼び名や。金沢行けば「金沢すいか」言うとるし、品種の名前ではないんやね。最初は中が赤くて丸いから、「丸紅すいか」と呼んでいたね。今はそれ言わんようになって、「能登すいか」に決まった。

すいかの手順

石川県の指導の下つくっとるんやけど、そこに自分の好みも入れたりしとる。やりやすいように栽培体系をつくってやっとるわけやね。

まず、すいかのハウス準備は２月の初めから。雪のある年は、雪をどかしてナイロンをかけて、準備をする。種をまくのは、早くて２月 20 日過ぎからまいて、そして何回かに分けて順々に「接ぎ木」をして、苗を育てていくわけやね。すいかの種をまく前に「台木」の種をまく。台木の上にすいかを置くわけやからね。２月に種をまいて、３月に接ぎ木をして、４月に 20 日前後に苗を畑に植えるということになるね。

そして５月 20 日頃にすいかのツルをのばして、花を咲かせやすくする。花は５月末に咲くんやね。それから、ハウスの片付けは５月末から６月の間にやる。私らのとこは「露地栽培」やからね。ハウスを使わんでつくるのを露地栽培というげんね。保温設備のないとこやね。普通の気温で育てるはいろ。最初はビニールのハウスで育てて、暖かくなってきたらハウスをとるんや。４月くらいにとると、枯れてしまうからね。

６月になったらすいかはピンポン玉くらいの大きさになるんや。そしたら、その中から良いものだけを残す。そして、７月 30 日頃に収穫するわけやね。

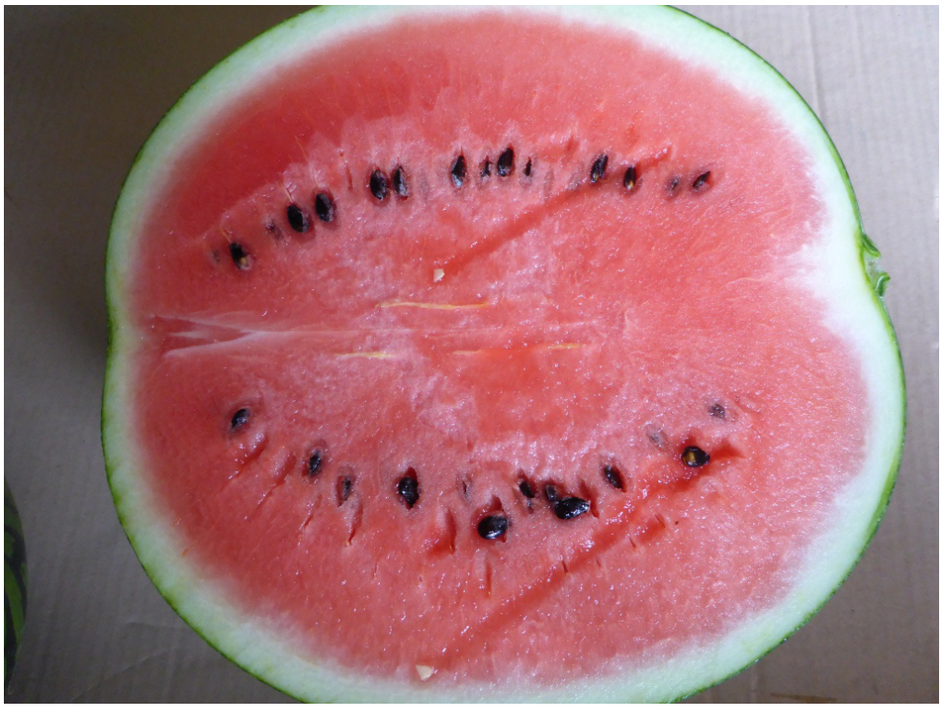
旬は、天候次第やけど、やっぱ８月やね。汗が流れ落ちるほどの天候やと、やっぱ、すいかはおいしいね。日光によって糖度が変わるんですよ。暑い日に、冷たい、甘いすいか食べられりゃあ、最高やちゃね。

肥料

肥料のやり方が品種によって違うげん。すいかができたときに、変形しにくいやつと球が大きくなるやつがあるげんて。それは肉質が固いげん。肉質が固い品種はスーパーで好まれるねんて。まだまだいろんな品種があるやろうけど、違いは肥料関係やね。材料は一緒や。「油かす」は何にでも適しとるんや。油かすっていうのは、菜種の油をとったかすのことで、すいかの日持ちがよくなるげんや。私のとこは、「甘喜（かんき）すいか」と「縞無双（しまむそう）すいか」っていう品種のすいかを育てとるんやけど、この２種類のすいかの違いは肥料の量やね。その畑によってもやる量が違うし。肥料はやりすぎるとすいかの形が変形するげんちゃ。丸くならなかったり、固くなったりね…。

接ぎ木

土に直接、すいかの種を植えてそのまま育てるんじゃないげん。そうすると、連作障害が出てしまうからね。すいかの芽がある程度育ったら、別の作物の根っこの部分（台木）を土台にして、そこに挿す。私は、かぼちゃの台木をつかっとるね。すいかに適した台木はかんぴょうと、かぼちゃがあるんやけど、かんぴょうの台木を使うと、すいかの実が柔らかくなるげん。逆に、かぼちゃの台木を使うと固めになるんや。固めのほうが日持ちするげんてねえ。逆に、やわらか



すいかの断面図

い肉質のすいかは、あんまり日持ちがせんげんて。日にちが経つと、果肉の色が濁った赤になる。どろどろした、生々しい感じになってしまう。売れ残るとそうなってしまうもんで、八百屋さんからも、「台木関係を見てくれ」って言われるわ。日持ちのするすいかは、いいがんに買ってくれるわけや。だから固い果肉がいいわけや。でも、固い果肉は、やわらかい果肉より甘みが少ないげんて。やっぱり、台木によってできるもんも違ってくるげんちゃ。

千里浜の土壌

すいかをつくる土壌には、酸性の土壌と、そうじゃない土壌があるげんちゃ。それによって肥料のやり方が違うげんて。

ときどき、土壌を測ってもらっとる。そいで、「この肥料を少なくしたほうがいい」とか言ってもらって、ときどき肥料をかえたりするんや。測るのはすいかをつくらん時やから、冬やな。窒素系が多いとかよく言われる。栄養がありすぎるのもまずい。窒素とか塩酸菌が多いとちょっと違うげんて。

うちらのとこは千里浜の砂地やね。千里浜の砂の粒は細かいげん。内灘あたりは粒が大きい。砂が大きいと乾きやすい。その天候にあわせた水分補給をせなだめねんや。その年、その土によっても違うんや。だから、その判断が難しい。どの土がいいかはわからん。

すいかの座布団

砂の上ですいかをつくると、どうしても日が当たらない部分があるげんちゃ。あれが黄色くなるげんて。黄色くなると商品価値が低くなるんや。すいかの下の部分を青くするために、白いマットを使うんやね。まあ人間でいえば座布団のようなもんで、穴が開いとってそこから光を吸収するマットがげんて。それを使って、すいかを青くしとるわけやね。

見極め

集荷場っていう生産物を集めるそういう場所を、農協のお世話でつくっていただいたんやね。自動的にすいか１個の重量を決めて格付けしてくれる機械があるんやね。秀品、優品、良品、並品、格外っていう５段階があって、その基準で格付けしてくれる。接ぎ木によってはこの段階違うけど、私らのとこはそういう階級でやっとる。格外っていうのは、その規格にも入らん悪いもんやっちゅうこと。変形したりしとるやつやな。今では少ないけど。今は昔よりそういう変形する品種が少なくなって、いいものができるような品種を種屋さんが考えておるもんで。すいかができたときに変形したやつは、かたがっとるんや。丸くなっとらんげんね。秀品なら本当に綺麗に丸くて、優品はちょっと変形しとるかなっていうくらいで。良品は次の段階の変形。だいたい並までが売り出せるな。今は並品やとちょっと買い手がおらんね。売るのは、

秀・優・良までやはいろ。それよりも下もあるんやけど、それやと商品価値が少ないんやね。買う人がだんだんおらんくなってね。少なくなったわ。格外が出た場合は安く売るかね。買い手がいない場合のは破棄することもある。

すいかが熟しとる見分け方は、叩く音でわかるげんね。100%とはいかんけど７割くらいはわかるわね。響きが良いのと悪いのと、数をこなすとわかってくるわ。響きが良いと、若いんやね。熟しすぎると、音が悪い。

スーパー行ったらすいかにシール貼ってあるでしょ。あのシールの貼り方一つでもいろいろ気遣ってるんやよ。切株から２センチはなしてシールを貼っとるとかね。まあ、見よいがんにせなだめやちゃ。

年間で売り出すすいかの数は、2014 年に組合に出した球数で 35000 個かな。去年は 40000 個だったし。その年の気温差によって球数がつかなかったり、多くついても悪くなって捨てたり…。その年によってやね。

すいかの他にも

すいかをつくらないときは、稲と大根を育てています。５月いくと休まるでしょ。稲もやっとるもんで…。すいかの次期が終わると、秋大根の方もみんな始めるんですよ。稲の種類はいろいろあるけど、俗にいうコシヒカリとかを主にやっとる。畑の面積は全部で５ヘクタールで、１ヘクタールくらいの大きさで稲をやっとるね。圃場整備されとるから。田んぼにも大小いろいろあってね。10 アールとか、大きいので１ヘクタールあるかね。

市場開拓

すいかを売って頂くためには、市場との取引をするんや。生産者も有利販売をしたいわけやからね…。

せりでは値をつける。量が少ないと高く買う場合もあるし、多い場合は安くなったりね。その時その時の状態やけども、その品物があるかないかで価格面に大分違いがでてくるんやね。今日は 1000 円やけども明日には 2000 円になる場合もあるし。2000 円でも 500 円になる場合があるし。市場でのやり取りということやね。

市場開拓をしてこっちが有利販売ができるような体制をつくりたい。そのためには電話１本で商いを頼むよりも、行って顔をあわせて話しあって、いい間柄になって売っていただく。初めて行ったときは縁がないはいろ。お付き合いをして、親しくなって、いろいろ言ったりあちらの意見も聞いたりして、便宜を図っていただく。コミュニケーション、それが大切やね。

継ぐ

粟生町の組合は、うちあわせて７軒の家がやっとるよ。そのうち後継者がいる家は２軒。後は定年退職した人の家が５軒やっとるね。その中で続けるのが難しい家もあってね…。羽咋市の農協の中で、後継者育成をやっておいでるというよ

出荷するすいか

うなことは聞いたりするんやけども。私らのような組合やと対策はしにくいんやね。外部へ勤めに行ってる方が多いから、後継者はだんだん少なくなっとるわね。集荷場を１つにしようという話はでとるわ。

次世代へ

とにかく努力することやね。何事も努力やろうけど。良いことも悪いことも頭に置いといて、頑張るしかないやろ。でも、本人が考えんとだめやわ。本人の意思がないと。

上手くいかない時もある。１つは天候やね。計算通りにいかんことがある。だからそれに対応するだけの努力がいるわ。失敗したがんもいい経験になる。上手くいかんくても、マイナス面をプラス面にするようにせな。

自分にとってのすいか

それは、生活の“糧”や。何十年とすいかつくってきたけど、いい年もあったし、悪い年もあったし、天候に左右されることが多かったね。

いいものをつくるということは商品価値を上げるということやから、それにあわせたメリットがあるわけやね。そのメリットを大きくせないかんから、いいものをつくる。だから、日々努力しとるんや。

［取材日：2014年８月８日・10月20日］

PROFILE

山上　一郎 やまじょう　いちろう

昭和11年10月19日・78歳
農業

昭和30年からすいか栽培に取り組み、中京・関西圏に販路開拓し、羽咋産すいかのブランド化を行った。またすいかのみならず、水稲、大根などの栽培にも取り組み、大規模複合経営体として地域農業の所得向上を図った。能登の里山の砂丘地を利用し、すいかや大根等の農産物の栽培に取り組み、砂丘地の保全に努めている。

● 取材を終えての感想 ●

私は初めて「聞き書き」というものを経験しました。今までそういった、取材を通して文章を作成するということがなかったので、初めて経験したことが多かったと思います。

最初は上手く取材できるのか不安で、文のまとめ方もよくわからなくて、途中で投げ出したくなりました。でも、今回の聞き書き研修を通してたくさんのことを学びました。ICレコーダーなどを扱うこともそうですが、何より取材をしたことからいろいろなことを学んだと思います。質問の仕方や、相手の話を聞き、そこからさらに話を広げていくこと、そういうものは後に日常でも生きてくると私は思います。そして実際に聞く話は、インターネットで調べることの他にわかることがあって、とても面白かったです。また、私は初対面の人と話すのが苦手なので、取材ではコミュニケーションの取り方もわかりました。つらいことや大変なこともあったけど、この聞き書き研修に参加できてよかったと思います。（池田千華　写真：左）

私は、すいかが大好きです。なので、私たちが能登すいかの取材をすると決まったときは嬉しかったです。そして、能登すいかにすごく興味がわきました。１回目の取材は少し緊張して、うまく話せませんでしたが、山上さんの温かい人柄のおかげもあり、なんとか終えることができました。それ以降のインタビューも、山上さんの人柄に救われた気がします。

しかし、インタビューの書き起こしや、文をまとめることは本当に大変で、かなり苦労しました。でも、完成できてとても嬉しいです。

山上さんのお話は、私の知らないことが多く、とても勉強になりました。山上さんの農業に対する姿勢や、すいかに対しての深い思いが、とても強く伝わりました。

一つのことに生涯をささげるのは、本当にすごいな、と思いました。私も山上さんのような生き甲斐をみつけ、そのために生きていけるような人間になりたいと思いました。

（森田美悠　写真：右）